集義外書　曾簡一

口 13
18
1

門跡巻 口 9 1

集義外書序

集義和書及外書ハ息游軒熊沢先生
のあらハせる処之外和書ハとそれ世乃
外ニ稀なる外書也言ハおろそ聖賢の書
もやうやく世乃人口に膾炙せんとす
るそい經世治教の一端なるのみならず
乃ち偉士杉山先生乃ことわれいまやその徒

秋一日こゝに秩を
すゝれ一帙この比こゝに書を得くこゝま
とよろこび読もくゝ先生の道融一才しろ
きこゝに信一貝おそれくゝも梓ちうに免侍る予嘗て
の徒乃諸ろしとき〻ろ此書載かところ
或ゝ人乃かゝろほゝえ一まゝにろの有志
をゝ次よ及ひてゝ吏かゝろまゝにゝ

ゝ毎有又或ゝ
と考ゝるかいゝ毎おゝ
とりゝ
雖されゝ
なまゝゝ
師をハ今ゝ乃書
にのゝひゝて理
ゝ

述作其奥旨ときいちじるく道をもと
ひろめこゝろざしてかゝれるなん
寶永庚寅初夏下旬　書肆小山知常謹誌

劄簡一

一幼君をそだてまいらせんこと。
これまことのとき。知覚ありて
君とせんもしらんくらゐ。君根をそだて
なさんこと。これを後にせば学問
を改めんこと大うたがひ。不君の
ものとなしてそだてんも
はじめより不君のものとなしてそだてんも
いたりて天地の間よりて善よりあくにうつる人
なく。善事ばかりみちわたりて悪に
道理あり。善多くして別に多官ありて悪のまぎれ
なし。其典十義有てこれに教へたてゝさそひ

六藝よりおそくも。其作法よりは。皆吾事たり

一幼君ゟ礼を教ゆるよハ。殿様ごのおそばにて。書院の礼儀をもつぱら。掃ハ世間ふある事なり。

ゟ不叶礼式をもつぱらせ。七ゟ八ゟこゝを。他物ゟてゟ。ゟもつぱらハうらやましきこと。

ゟ。ゟの役者ゟ。ゟ。ゟ。

よりけり。ある人ありけり。後前をあくあそび。稽古をだにもせで。ただ酒をのみ。女をもてあそびなどするよりおこりて。武藝八藝をうしなひ。武士の初より武士とはいはれぬ事になりぬるよりこそ。師よ弟子よといふ人有やうになれ。いはゞ八十六七歳の老人を。八歳の馬よ車よといふ人多き也。今八一生もかくのごとくなるべし。武藝の師をとるよりも。道理をおくいの主とするなり。甲陽軍艦よりも。武士を藝者よりあしくいふ時也。

武道乃ときゝてまなぶ人は。成人の人をもまつべく。退屈ものゝ。かたりてにまかせてきゝたるをもて。武藝者よりあしくいふ時也。

一　算數八才藝をも長し。六藝乃一ともいふべき事也。

乳もをきうくまけてそへられぬ。一時乃程おくもう。幼君のまへおもてなしあるべきあつかひ。苦労なくしてあるべきもの也。

日本もむかし武士八武藝ばかりにて。文通ようもなかりき。今ハ武藝ばかりにても。人合戦のようにもなりて。

より下ハ六業。廿業もそろうにてもあるべし。八業ハ成人の人をもつかふべし。八業ハ

あれども。かたくとへおもてなしあるべきもの也。

ことあるとはようくして平生商人の模よ。利害の把握をハやさ
つ記。今ハ等数をいふ。等数とハ利害とこゝもとり軍法みも
等数を用ふ事あり。数のかずハ利をとりあつかふよし。
律等（リツサン）あるハ礼風流なるものあり。右のごとく幼か成人くら
ゐの事なり。二番う三番あつて。一番ハ幼者よりうしまり。二
番ハ義をおとくし。十七八ばかりハ。もつて面白き事のごとく
ものごとくひかるゝ。おやまらうどんをあよ。
おとるをきつゝとおやまらうどんをあよ。
のおくそまきあるをハ。ものごとくひかるゝ。基本成人の後まで心根
ハ利根の者あれども。ものごとくひかるゝ。もの後よ
ん処のごとくハまりさるにかゝつて
うをおもひ。或ハ生をとりて的よあるひ。或ハ木をふ

てゞ。ゑ縄乃さいた。鞆のうちあり。緒をもらうとおもふ。うしろ
をうつけゞとをれくをれるまで。きつて八月松の通度ごと
き也。筆ハ。基よれ松よ流のごとく。緒方も流のごとく。
おさしゝ。ものいと禁ゝ。松吉のものあひまゐ。
おハ名別之。緒方ハ。基方ハ。基方つゝあんを。二流を
とり当ることゝそうさるあり。馬もうつ。筆をとく
記当ることのを。師ことゝ。緒頁ハ運と一ゝふあるもの
あれど同一位てハゞうたあり。十六七よりもちり
ゝをとうくこれあり。ハゞうたあり。十六七よりもちり
ゝあつこれハおそいとあり。ゝ流ハおそいとあり。
座をよとうとう。堀これあるとをうくゝ。ゝをとやこゝをうくゝ。

書生のごとくにもよう。恐ってん人ハ声のかるゝ時ハ。
ゝり三十まくも。技藝よりハ。ねんごろにして。我ハ称するき
けるをなるゝゝにもれを。まゝ無そのゝり。爺骨をくやう
み御ゝ。病をかさと。神知門よりくゝ。利根聰明也。
父の神の精明あれて。まゝるゝを賢知あり。其れの精
きこと。大学の理をきわめ。洛よ人のごとふもくゝ。今乃
いつるき処よおゝとゝ。おいくゝ病をも治ゝね
一乗書略。新案の古よ。志れおりゝきん治ゝ。主人ますく
めゝく。おけ用度いゝくゝあるゝくゝいゝんや
返書略。そゝくゝ志。平人よりあゝもゝをゝれる賢者よ
もゝかりまゝれゝ。志を画ある一きゝ。人乃用よりそゝね程
いゝおつてあをゝゝも。後よ法人のゆゝとを治ゝゝハ不治ゝない。

同ゝくゝ御家ゝゝるゝゝりゝるゝゝ。そゝハ筋用あ治人の
邪法ゝゝるゝとゝ。なゝゝくゝいゝ教化ゝてあを用ひゝゝを。
なゝり筋用あるゝゝ人情のゆゝとをおゝゝ。
ゝるゝゝハ十人ゝゝゝゝ不足のおゝりゝゝと
ひゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ人をゝろ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
一来書略。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
返書略。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ずつとゝむ人の物ゝいきゝ又老農の少しハ怪のこゝ也ちゝ年ハ
世のゆくゝ怪乃ふかゝるゆへ也。年ハ怪多くやきゝ又つゝきゝけゝ
ゝゆへ怪演。今の三箇一を減てゝ人の迷惑よ及ゝゝ
と多よりてゝゝゝ又老人乃ゝゝ
すくゝゝゝゝ
多ゝ。ゝ年ゝゝよハ二十倍ゝり。ゝゝ一ゝりゝゝ
者ハ。今ハ十ゝ一ゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ

そ[illegible]減ともも。坂へうそそ[illegible]古人もの。ふを[illegible]たくとのハ
子孫おそろしみとゝ[illegible]
一来書略。新田をかことへ人を書の半一そ。[illegible]
作いう
返書略。田と田畠とうあく。[illegible]林石毛の地の[illegible]ハ。士民た
ゝたゝりあき把ゆり。[illegible]ハ野あく[illegible]ろそくい。甚
上新田とひきて。[illegible]の田あく[illegible]ようくかん之
宜へきうよい。毎人さうを[illegible]新田ゆうとも。書よ
ゆへハ。そ[illegible]ハかことをまゝ。[illegible]甚義あそ。
義とそへハ。大通とれの[illegible]のれ民のさ[illegible]
けゆくハ。新田をとうて宜[illegible]ハ。[illegible]岡古乃[illegible]
ろく。材未前不自由たる[illegible]ハ。その法と[illegible]へうふ。[illegible]焼

ことのうつをれあよ。新田成おとそへ。堀渕六百石の人ハ田
地千五百石よハいもあまりあ[illegible]ハ。堀渕よハ人多入ともも
れて[illegible]ゆりや。[illegible]乃やひとゆ[illegible]ハ。堀渕よハ人多入ともも
新田ゆり。人へうみく坂。甚人[illegible]入ゆへ。[illegible]ハおことゆ[illegible]きハ
ねゆふゆく[illegible]ハ。[illegible]ゆあく[illegible]ハ。[illegible]ゆあ[illegible]人を速変せくことゆ[illegible]ハ。なう
ゆ[illegible]ん[illegible]ゆよ。[illegible]一重度[illegible]ハ。[illegible]人[illegible]ハ。[illegible]後世よ。仁政のとゆる
一来書略。近来ゆ年よハ[illegible]ハ。[illegible]ハ。[illegible]ハ。

き故なり。平百姓よりも下作の者は、男女ともに農事を励むべし。夫婦ともに働き、夜なべをもいとわず、二十石三十石作りの家は、男女ともに働きて、次年にゆとりをもつくべし。百石二百石作りの家は、男女ともに働くことはなくとも、次年にゆとりをもつくる

いや年の人れかうるみよ
人法ひそそそ人れそたみよ
百人小百姓のうわとけいけう第一そ中をいけ法まみく
立いてとよりたふ非法をまねれたち。ねえ今附武まさ
ら志。おまち志ねうてとて人
ひてふ仕ハ世よくきこふ
そと一知志ちれ。仕ハそ
下こうう。君長の義そう人つ
ふをかいもろをもつ世
乃まちらし

一本書曰。往大名九。大樹君ハ君命と号第一ハ行それいき
やる人幼少よいてあをた乃よ仕度い

返書曰。大樹君の天命九仕ハ冥加のあり不申ねよ困と活
らをいる。第一九思ていき通乃人をおこ止めハ乃と
う。仕ろふよりて仁愛を元し。女民をもくく。き
いふろと思をも志ねとあるし古人の功とし乃くとかん
旨とれ仕冥加を減ることり。ようしめくれも
罪ハ上一人なあるまち後を。人ハ天元乃ちちるゆへ
人の多あよ天命あり。多のく
ちをへ人れ君そのようおやま
一来書曰。世間よおいましいをうをへ如ハやあるもくい話
ちの新新申ハと多い。おいましいをうをの。大と仕合悪
支とのかくねい
返書曰。おかんうをくおいましいをうハへや必徳まて仕

物を取ることもかゝはらず。何ごとかきゝ
ハ取つもいまだせさるあり。さる者の知行をそんさ
さるゝに今日ハ日さく。不当ものゝ
百石とるものよ。四百石とさるゝ
もの。そこいく八取ある石も。いまだきゝ
取つも。いまだなんら吉事ある。それハ和を
仕合あきハ大なる道よる。
物ものとつて。神をもまことと。
不測乃神変ハいへども。それハ心そこゆへ。半人のそこぬ
るまでそれ。それハ今時の利合者ハ神明不測乃理り
ありて。奇物とかく人の西利をえることをして利
をもとめいとをそく人をそこ
ことハ。時邪はして作。

其勇不吉の如くありて。又邪法のごとくよりいでて仕合あ
しきことなくいくれ
一来書略。仏といふものを。仲あるハ釈迦（シャカ）と達磨（ダルマ）
をかハけるの位よ。理をそこそこるものあく西体なく
志ありるよを宮乃地玄。清あ
やこもることはいく
返書略。仏法の真そん法を
そこと仏くひとそハ好人まれ
物をもて。人乃位をそこ。清法をひろむるにくい世ま愚
痴なるものハ多き故よ清法を教かよくひろまりそ
祖師くい名利なるこやすく
知見なれものよ仏まハ愛宕山の神垂ある成ん

地名と名付。こ神の霊ハ此乃霊にとりあつまる処。
法のこれけしき澄れたる所ハ神あり。とくと見るべし。神
をまつるやうハ。神名を記したる木札を霊代とするもよし。
くにハ地名も記すもよし。神酒そなへ時同じ
もしまりあつて。事なく末かけて。ハ地名と
水もこ木あるもく。澄のみ。ハ神の守うもく。神酒清
へし。神霊かとりあつこれよりこれなくなり。孤の虎は域をうばふ
なくし。孤の虎は域をうばふ
一来書略。人をうしなふ方といふあり。けだし此
もとうるすい。不思こうれいハいく
返書略。其の字ハ。よみあやまりてい。なり。ハきまり
いまてりくよくてるよりこれ出来ぬ

えてうり。不知なるものあり。右不把。和一把よこいー
あくいい。生綱そ。みよいそ
いてゑも。うちうー。あ
て。霊を合るおも。紙
せうこくても。知るべき紙よ
一来書略。近来儒佛共に衰不都。
物もの。のうちき。記れ
まー。を以志氣あり。其
多なうまはこ。私及へまい。
返書略。いあへうくも。なくて
てもの実よ功あるかのるも
あるへけまこも其うりて。

儒も佛もともて。偏私乃悟道者の報よりひあるく人
多出来ること。これ又世の害ある。害悪おまくねに害業
乃人てのうへハ。なにより仏てよりそへをくいもれいつまも
仁者ぬ人書法のまゝ付ともて。平人なおれ。文学ぬより
て。其平人なれおおくれなうらうくようろくろう
きぬ。おれけるまゐてハ。学ぬよりて。学ぬもある
一ことゝ。ゐまことけく。世ことゐ。
附ることもいてて。もれまおくい。吉私ろ。自己ぬ得ぬあ
多くいて。幸高ろう

一来書略。世人乃まゝいこと。民ぬ困窮（キウ）ハいつまの根ぬより生
ゝ作や

返書略。世人ぬ冷ゝハ。（イ）美緒の浪世ぬよりをろう。民ぬ困窮
ハ。世乃者より生ぬ。ゝ作ぬもをゐ。もとより十年。者よ
ぬて。浪世ぬるこの作多ぬあまハ。多ぬ委ぬやめしこと
まハ。多ぬ及ぬの多きまゐてそい。美緒乃浪世ハ。かゝて
て数十百人あるへまれハ。もも多ぬ割ぬかゝ人。
人の迷惑をねを。仁政ぬ改ぬ大道ぬ行れいて。一人も迷
惑ぬるこのなゝ人ぬまゐ。国窮ぬやゝ可い

一来書略。仰ぬ云国安道ぬ行ハ。必数ぬるくこのらこと。も
ぬ年あまハ。希く扶ぬ
あるこや

返書略。ぬ年ハ者道の者ぬ。国乃なけまハ。天気不順
ぬて。大穀全くこのるぬて。民ぬ窮ぬるあるこ
者ぬこと。其乃ぬ。一年ぬ。ぬ年ぬ。ぬ年ぬ。ぬ年ハ。教業ぬ出

年に至れば七十餘年といひつべし。かくある人この物よ。などいふ物ぞ。ほどもなく放よ。後のほどまでもあれ。老をみるに妖といふべからず。況や年をとるも同事よ。

一未亡人。老の孔を悼て喪孔を悼ずといふ。喪孔を悼ずといふ。喪ハ哀戚をもてす。

あらん人のよをさめくにおろかなる人の義を取ら
うるもの。我邦の神代よりの美風。けだし固乃有事或は
うちうちの災。日本中よりも許多く。傷ひ乃ことくせん。
富貴乃人のよろこぶ。貧賤のものの恨といふ。貧ち
財もつくしやまもあるも。富ひとの至
て万民喪祭の礼乃。手ひよ簡略なる。我固乃
俗まで。喪祭の礼を。易簡なるにうつれよ
ふくもろもろのおひうつ。固の財をよはいさん。下に及ぼしてうるお
うんきことなるべし。礼の煩ひ敬をそこなふの甚しきものを。そ
分をそこなふのものをそいて。礼をおこなひやすからしめ
学者礼。喪祭を専ら礼を修るもの。通学の徴なり

よハ俗へいハゆるの礼。我中華の礼を易簡よし。後
さるもの。俗世天下に。通乃行ふべきをかんがえて。後
の君子と称するもののうち
一事言略。実もよハ敬多くハ。俗を易ハむよし。朱子の喪
礼よハむよし。朱子の喪礼中あとも。おとるの。憾つ。きもと
ゐれ考あをもちくないおろうといい。主学よの流弊去
のやうにて。礼よハむよし。甚ハ人れ有つる恐人乃。虚偽造を
をうあらめくに。後言仕ハ乃。心ハ有べきことのよい
超言略。人ハ心ハ礼をうしなひ
くい非ありをもかくして。を非とおもハれまくい。弟
同志乃義務よ高て。不得已て。他の学よ流れたのえを。
ヤ事ハいへども。名をさんうとて不可い。て其義論の通

ハかくのごとくの名ほまれハあるまじくおぼえ候。予を心よからずとおぼしめすらん。されども仏を罵詈せんよりハ、ただ法華経を信じ給へかしとこそ申候へ。過去の多生のあひだ、父母ハ申すにおよばず、一切衆生にうとまれてこそ候へ。静かに思ひ候へば、当時の念仏者ハ、ただ阿弥陀仏ばかりを知りて、釈迦仏をば忘れたるにて候。されば、善導和尚ハ、千人ハ千人ながら、万人ハ万人ながら、阿弥陀仏の浄土へ参るべしと申して、一切経をばすてよ、捨てよと勧めて候。されば、日本国の人々、皆阿弥陀仏の浄土へ参りて候ほどに、いよいよ釈迦仏ハ、あだ仏となり、法華経ハ、ひるまきとなりて候。されば、日本国の人々、皆無間地獄に堕ちて候。

例せば、守護国家論に、法然が選択集を引いて、一切経を捨閉閣抛と書かれて候ごとく、善導和尚の観経の疏の第四巻の定散二善の文に、捨閉閣抛の四字を置いて、正行を修せよと勧めて候。されば、法然ハ、観経の疏を読みて、観経ハ、法華経にすぐれたりと思ひ候ひけるにや、観経の疏の上に、法華経ハ、観経にすぐれたりと書き

天下の倫をそこなふ。其の罪一人より深
きは。儒ふの如よそほひて。其の実一ツ
も身へ帯をせず。孔子より罪人の者ども
返書略。不忠にして。虚名をかく
のごとくにをこなふ。其の罪又重し。
よき人のおく仕れしことも。おもせい。当世う
けんかたくいにくき後世の名をねがひ。利ふ
くに百事を捨ておしむ。そのごとくの
いへども。其の実なきもののごとくにして。
の縁なくそこばく違ふ。仁義忠信
いふ。武士乃至の位。この故実
を本とよく。名をねがひ利をとと仕ふ。

利ふくに百事を捨ておしむ。そのごとくの
いへども。其の実なきもののごとくにして。
の縁なくそこばく違ふ。仁義忠信
いふ。武士乃至の位。この故実
を本とよく。名をねがひ利をとと仕ふ。
当世うけんかたくいにくき後世の名をねがひ。利ふ
くに百事を捨ておしむ。そのごとくの
いへども。其の実なきものの如くにして。
の縁なくそこばく違ふ。仁義忠信
いふ。武士乃至の位。この故実
を本とよく。名をねがひ利をとと仕ふ。
よき人のおく仕れしことも。おもせい。当世う
けんかたくいにくき後世の名をねがひ。利ふ
くに百事を捨ておしむ。そのごとくの
いへども。其の実なきものの如くにして。
の縁なくそこばく違ふ。仁義忠信
いふ。武士乃至の位。この故実
を本とよく。名をねがひ利をとと仕ふ。
天下の倫をそこなふ。其の罪一人より深
きは。儒ふの如よそほひて。其の実一ツ
も身へ帯をせず。孔子より罪人の者ども
返書略。不忠にして。虚名をかく
のごとくにをこなふ。其の罪又重し。

利ふ好ふ。義理とも。私をもつてつゝみと。逆心をくこと
出来を好ふ。己が分とも事よ。ハ。
いふてもそのまゝれいふ名をねがひ
ますをハ待もいふ。あやまりて当世の名をねがひ
なの私心をかんがへ。人乃至
人れ私心をもつて書ふ記して後世のそしりを成
ふ事ほどのよい。当世よハ。
りいふ事ともなめ。みくきとも。
ふいふ。山鹿子のおやまりいくとも。おもそ
義よ入ことあるべきのよい。
ふるふよい。死後の名ハ利ふ後あ
仍仁当亜欤なるものそハ後世の名ハふるとも

一来書略。山乃江別（石狩。亀尾老儒と兼命するよりハ。
はるかに出されし。関く取及ハハ紅法をもつて乃ち優人
ゆくゆく年をともなるまし。きハ
人そ多くうかゞ。かくのごとくして人たるかの
て世乃よいおくいつゝん。去ればこそ。儒学をきゝハ。いつよ
くよりるゝまされし。一笑いつて巻を
返書略。山加藤弘蔵史ハ武士なるあり。儒老ハ儒
なるよハなるゝあり。武士なるとさとりれ
なくなれあり。亭を儒老をひさるとさとりれ
聖人のまハ。人倫を明らかにするよりよく学の人也。
平らかなる好人となりて。何乃ゝきも。
ゆくゆく

一来書略。年月一日ハ。今日ハ
も。関都のまま月一日ハ
いへとも。久たゝかくなれハまゝ
作。石狩ともかくなれハまゝ
返書略。拠世ま月二日ハ
ハ強心ある志ハ。ゆゝ小ま
そく。強心ハなゝい。柔強ハ
いゆへの大心ハ君ま。不ハ心
心を知よりけ。共ハ心年見ゆ
慶の心ゆゝいハ法乃楽ま
礼時よゝ多ハ楽心ハ
ま通ゝて武あり。あゝ紀綱乃ゆまりあるゝく

かくて民。天下を樂を利を利とする人の心
時のごとくそれ乃ち代ありてそこに而已。
多くして民ハ士以下位ある
もの也。民ハ士以下位ある
の教ありて君子ハ君子たるべき
なり。故に君臣ありて上下定まる。
父子も公服を以て。此日いろ〳〵
而已ならず。七八郎の如き大國の
乃ち其而已ならず。故ハ大勢の
也。故ハ大勢乃ち大勢を

とハ。乃池をそゝく。六藏よりハ馬種ならび鉄炮、
この師の遠ハ。乃ち松ハ古ハ。武士ころの
ちをしくいふこゝろ。紹ま
あやまちなり。家業（キャウ）とかりの。
かれてをこゝろのちり。上ゝなり師範（シ）ゝ成ゝ。不束ハ
害してまつきゝ。この師乃ち獣をとゝまと沈りの
巻を割をれ。鞍とかゝらゝ乃侍をとをくやりみ
と。松も法ありてゝゝ。戦陣（ヂン）ありてゝゝ武士を
是非ゝ。先ゝ多あるハ馬川ちゝ以ゝ鉄炮ハ鈍り
あるハ。刀方にも物ゝこのちり。物ゝ用ゝハ損ありをを
うちかゝりちゝゝとれゝ。士乃武事とおゝれ。そゝり
とゝか。あゝれ。乃ち制禁（セイキン）をれ。その士乃ちみゝハ

あゝる事ましなり。あゝゝれゝ。神ハを力そして歩
行をゝのちり。奇ゝかけまハ。鉄炮乃教ましなハ。家中の
ハ。ゝのかゝりをゝ。士乃武事よハ。ゝ。士ゝ
ゝ及ゝす。ゝれ。神ゝ。乃ち田畠をゝれゝ。
ゝ獻乃田畠を割をるを塗き。武事とをゝて。民の姓
ちれハかゝの西ハ百年ゝ。乃ちハ。今の鉄炮ちを
ハ。ゝれ。今も鉄炮の教生ゝをゝゝ。ゝとゆゝ。
松年して上ゝ物ましゝ。ゝ鉄炮ハ奥ゝ。牡蠣の田
島ゝ害をゝれゝ。ゝハ。ゝの物人ゝ。ゝ。
ましもゝハ。ゝの物人ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。後世のゝハ。文

人まれなり。又或たふ教ゑの行をハ。士民告げるとくき事を
おさふるものあり。是よりて制禁多く罪つよく人民を悪
まふらひきて。色をとるのと罪せハいろんで民乃父母
そうるものあんや。已とな
妻書略。仏法の我通妙用ありて。悩らしきる多く出先
ハ式ハ備ハ人間みあらん。我妙通力自在なり理あり是を
有法事ありてさらに石叶と云。或ハ基事を真
ひもかけ色とも。程経てそ方役よりひるると云。或ハ堵
納めて皆面ことわり。大地のごとく塔のごとく出ると云
ハ仏なり。我とも法華経乃時のあんかをそりとう
ーてハ。仏のもいふへきやうもなれ。さらも死もとうして。
活も出ず。多宝仏もおくるく仏ありとい
ふるなり。又

報色生ぬく。天上天下唯我独尊といふハ。是九仏勿
ちやうれかこうと云ことぼまこそ。おうそうか
おると云ふありう。又云ふ色寓言なり。生れ出る時乃仏ハ雅
を指うなり。報色死期のそ死(ドス)ハ。かうまでもなしと
云ハ。仏法乃あらんをよりきけハ出れも声まで
なくやうにあらーとといふ。ふハ仏れも。まこと
つそふ云ふ色ありうのやうのものあり。ふ云ハ仏なり云
ふ云ハ。報色の仏人ハ法(ほう)ふ云ハ幻術(げんじゅつ)也。
天竺南震ハ。幻術(げんじゅつ)ハ。学問をされーと云ハ幻術也。
あれ方役り。幻術をいふ。法をいろんれる也。塔の代りに
出うくふるふ。仏の乃理ふを出ふきやうふ。ふあく
物をやくふるふ。仏の乃理ふを明うあり。今の吉利

支丹の人を幻術のごとひなりさいつる。
或ハ銀書を作とれを。哭罪よろくそらまち切まをし。
ふさ〻の事ともの銀書しそうのあるさくかけまも作
公のかりく。されハ奇特あり。ひ人情欲の佛心をも
ふかくまハかの男をきうろうこ。或ハ恵月功徳まち
て。恵のごとく銀書をまれくいて通ともの
いへ。仏法乃流ハ。ハとうの人ことくあるべし。仏法ハ
いとまうて。ふ門いつまうもくいんや
迦書略。仏術の最も。善をあなものの
てかけまハ。なりうこ死ともの。善根ハ善根ハ浄こ人
みく。仏法のおろうも。気生を不侵まこ公より始まて。
ふさめく幻術もこれ

ハまこと名利ぞ我乃公ちく。善根ふりいくふう事
成。方後ふ名利ぞ我のふりあり。後世の佛ふ名利ぞ我のふりあり
うこそ。ふ後ふ修行ハ清僧ちうふも。方後ハあうきう
ハく。幻術ふうふ成ふ。ひ人ハ。ふうきうこくれんば
けのあうふうふ。ふあうふ関ふそふ。ふうへ
いうふさ後。ふ銀書の通力ふのこと仏ふうふに
ハふ。仏ふよハふうふさ。ふ後ふ死ふ

元禄十年の秋七月のころ、女人礼拝の霊場として名高き
ところの観音堂に、新西国三十三所の巡礼の者とて、
年のころ二十ばかりの女一人、ふと来りぬ。
その姿、いとうつくしく、髪のかたち、衣服のととのへ
ざまなど、いかにもやんごとなき生まれの人と見ゆ。
されど、いとあはれなる様にて、ひとりの供の人をも
つれず、ただ一人、観音堂の階の下に来りて、
よよと泣きくづほれぬ。
堂守の僧、これを怪しみ、
「いかなる事ぞ。」
と問ひたるに、女人、涙を拭ひて、
「我、不幸にして、父母にも別れ、
また夫にも離れたる者なり。
今は、この観音様を頼みまゐらせて、
後生を願ふより外に、
この世に望みなき身の上なり。」
と語りぬ。

女人は、ここまで語りて、また泣きぬ。堂守の僧、
いとど不審に思ひて、
「そもそも、汝は、何処の人ぞ。
また、何故に、かくは一人旅をするぞ。」
と問ひたるに、女人、涙ながらに答へて、
「我は、もと、京の者なり。
父は、さる公家に仕へたる侍にて、
我も、その家に、幼きころより育ちぬ。
されど、十五の年、父に別れ、
十七の年、母にも別れ、
その後は、ただ一人の兄を頼りに、
その家に仕へ居たりしが、
その兄も、昨年の秋、病にて亡くなりぬ。
兄の妻は、我を憎みて、
『家の財産を分けよ。』
などと言ひ、
『出でて行け。』
と責めたてるゆゑ、
我、やむなく、
わづかばかりの衣類と、
母の形見の小さき鏡とを持ちて、
家を出でぬ。
出でたれど、行くあてもなし。
ただ、観音様を頼みまゐらせて、
ここまで来たるなり。」
と語りぬ。

堂守の僧、
「さては、汝は、
父母にも別れ、夫にも別れ、
兄にも別れ、
兄嫁にも憎まれて、
家を出でたる者なるか。
いとあはれなる身の上なり。
されど、観音様は、
女人の願ひを聞き給ふ仏なれば、
必ず、汝の後生を助け給ふべし。
汝、ここに留まりて、
一心に観音様を念じまゐらせよ。」
と言ひて、
堂の隅に、
藁を敷きて、
女人の寝所を作りてやりぬ。

女人は、
「かたじけなし。」
と言ひて、
その藁の上に、
横になりぬ。
されど、
その夜は、
一睡もせず、
ただ、
観音様を念じまゐらせて、
夜を明かしぬ。

翌朝、
堂守の僧、
女人に、
「汝、
昨夜は、
よく眠れたるか。」
と問ひたるに、
女人、
「いえ、
一睡もせず、
ただ、
観音様を念じまゐらせて、
夜を明かしぬ。」
と答へぬ。

堂守の僧、
「さては、
汝は、
真に、
観音様を信じまゐらせたる者なるか。
感心なり。
汝、
この堂に、
七日七夜、
籠もりて、
観音様を念じまゐらせよ。
さすれば、
観音様、
必ず、
汝の願ひを聞き届け給ふべし。」
と言ひぬ。

女人、
「かしこまりぬ。」
と言ひて、
七日七夜、
堂に籠もりて、
観音様を念じまゐらせぬ。

七日目の夜、
女人、
堂守の僧に、
「我、
七日七夜、
観音様を念じまゐらせたれど、
何の霊験も無し。
我、
もはや、
この世に望みなき身の上なれば、
いっそ、
この堂の前にて、
自害して果てむと思ふ。」
と言ひぬ。

堂守の僧、
驚きて、
「待て待て、
早まるな。
観音様は、
必ず、
汝の願ひを聞き届け給ふべし。
今しばらく、
待つべし。」
と言ひぬ。

女人、
「されど、
我、
もはや、
待つ気力も無し。
今、
この場にて、
自害して果てむ。」
と言ひて、
懐より、
小刀を取り出だしぬ。

堂守の僧、
慌てて、
女人の手を押さへぬ。
女人、
「離せ、
離せ。」
と言ひて、
堂守の僧と、
もみ合ひぬ。

もみ合ひたるはずみに、
女人の小刀、
堂守の僧の脇腹を、
深く刺しぬ。
堂守の僧、
「あっ。」
と叫びて、
その場に、
倒れぬ。

女人、
驚きて、
小刀を捨てて、
堂守の僧を抱き起こしぬ。
堂守の僧、
息も絶え絶えに、
「汝、
観音様を、
信じまゐらせよ。
観音様は、
必ず、
汝を、
救ひ給ふ。」
と言ひて、
息絶えぬ。

女人、
堂守の僧の死骸を、
堂の隅に、
引きずりぬ。
女人、
「我、
観音様を、
信じまゐらせたれど、
観音様は、
我を、
救ひ給はず。
我、
もはや、
この世に、
望みなし。」
と言ひて、
小刀を、
再び、
懐より、
取り出だしぬ。

女人、
小刀を、
己が喉に、
当てぬ。
女人、
「観音様、
さらば。」
と言ひて、
小刀を、
己が喉に、
突き刺しぬ。
女人、
その場に、
倒れぬ。

女人、
倒れたるまま、
息絶えぬ。

翌朝、
堂守の僧の弟子、
堂に来りて、
堂守の僧と、
女人の死骸を、
見つけぬ。
弟子、
驚きて、
師匠に、
「師匠、
師匠。」
と呼びぬ。
師匠、
答へず。
弟子、
師匠の体を、
揺すりぬ。
師匠、
冷たし。
弟子、
師匠の死を、
悟りぬ。
弟子、
女人の死骸を、
見つけぬ。
弟子、
女人の死骸を、
堂の隅に、
引きずりぬ。
弟子、
師匠の死骸を、
堂の中央に、
引きずりぬ。
弟子、
師匠の死骸を、
女人の死骸の上に、
重ねぬ。
弟子、
師匠の死骸の上に、
女人の死骸を、
重ねぬ。
弟子、
師匠の死骸と、
女人の死骸を、
堂の中央に、
積み重ねぬ。
弟子、
師匠の死骸と、
女人の死骸を、
堂の中央に、
積み重ねたる上に、
堂の中の、
藁を、
積み重ねぬ。
弟子、
師匠の死骸と、
女人の死骸と、
藁を、
堂の中央に、
積み重ねたる上に、
火を、
放ちぬ。
弟子、
師匠の死骸と、
女人の死骸と、
藁を、
堂の中央に、
積み重ねたる上に、
火を、
放ちたる後、
堂を、
出でぬ。
弟子、
堂を、
出でたる後、
堂を、
振り返りぬ。
堂、
燃えぬ。
弟子、
堂が、
燃えたるを、
見届けぬ。
弟子、
堂が、
燃えたるを、
見届けたる後、
堂を、
後にしぬ。
弟子、
堂を、
後にし

とくろへ

一素書曰。主法以法車の車輪ともいふべきものなり
主法の作輪車にてめぐりいーや
返書曰。秋代なハ秋なりしひ。主代なハまたとりよ甚美ハ一
なり。大名の世代ありくいひ。法の輪ハ。文武おくいひ。
きいふ。天秋地秋乃秋代。人まの秋ハ大道ありく
人民都合の化をうくいふ。法ひろまりくより語。美ハ
武乃輪をうくいふ。人私に勇士徒をあくまりて
おくろへ。武士代文をあくれハ。法文をまりて
先ひきて。武家ハ文れ輪を知くいふの輪を入。文武武
ハ秋人をもてもまの風あり。法を全うし佛法をお
世のおくへて大なるーといふ秋ハ。秋道ハ秋乃秋をいた

人道ハ人乃あくをいた。佛ひろまりくより語。美ハ
車輪ともいふべきものなり。秋代なハ秋なりしひ。
もあるへし。不可不察

一素書曰。主ハ人の本ハ秋ハ三年乃喪を秋ハんや
喪をいたすべし。本ハ秋ハ三年乃喪を秋ハんや
返書曰。古人乃通義ハ死をとむらひ生をやしなふ
うれひなき義なるべし。別をとむるハ。
すべてくいふ秋ハ。ちかれくいふ奥列一切人あくハ父兄ともふ
ふべ

よりてものあり。死をかくし生ながらとりのありうくをみく
重人ともうる情をとくく。三年の喪をつとめあるべきもの
かうちんぢよあるべきをいふをもとひとつのハ
實ちぎをかくしてかくして。視ばかりをいくちんぢよ君
第の信の風俗かうちく。情うすくなりうる人よ。儀ゐ
三年ぢ喪をせちんハ必ずのものとかうめて。甚人の罪よ
あるべ。代とかうちく百千歳こけるひまあらし世ぢ
のくゐめるくものかりぐ。我ぉ喪ぢつとめちんハ一
人ぢ心ぢ信ぢくる人よてくひいり。我ぢとめく甚可ある
ものくい

一　孝言語。拾ちんよ改をとれのうちんぢ人ぢ
あるまといふまあり。いつまぢうちんぢ

返ぢ古昭帝ぢ時の雅氏とかりひまりけて大雷力ありてそ
ぢ下とかりくあり。ぢ人本改をうちんぢ
かりしめよゐあり。ハ時をうちんぢ下雅ぢ
うハ宇そ五百ぢ一雅ぢ帝ぢ成ぢ
ぢ公用ぢあく信全出ぢ。帝ぢ初ぢ五分ぢ
十年かうちんぢのをとし百民うふとのくあく
ぢ百ぢ。ちんぢ今ぢ人時ぢくとし用捨ぢくちんぢ
公用ぢをとし。昔二百姓奢ぢくちんぢ
し。民ハ天下の人をちんぢのれぢ。みくもしちんぢ
よ民を先ぢる先ぢくちんぢ。民を先ぢるハ他人ぢ先ぢと
ちんぢをとし。又民も小民ハ
ぢ一ぢ先ぢ約ぢ雅ぢ民ハうちんぢ人ぢよハ時ぢ他ぢ

集義外書卷二

前簡二

一　来書略曰本國淺陋人鈍而何以有所開悟而可以入道之門耳云云

返書略聖人の道れ天地の間に滿ちて古今に亘り萬世に及ぶ。秦代の遺風ありて書を焚き儒を坑にせしより。其後歎明天皇十三年壬申の百濟より釋迦仏像并に經卷を上奉る。聖武帝其法を後佛法の盛んなる事三百年。仏教の世を靡うこと甚しくて。佛法を學ぶ僧侶多くして騎恣なり。近代に至りて益〻甚しく。寺院の數六百餘箇所。僧尼の數七萬餘人。盜賊の如く騎恣なり。中華八紘海の師表なり。

日なか功わること大也禮樂。書数。宮室。衣服。舟車。農
具。武具。醫薬。針灸。官職。位階。軍法。ら馬れ乃こも外百工
技藝ふもるまて。一そ一そ。中義ら乃もこさ分りもなく。か
らざるなし。道徳ふれ真實大學の乃こゝろのいまこゝ
ふ。強れも天神地祇人王乃始ハ神聖の流れゝ而
おいハ不言ふして大道ふ行ふる。中義を日本もゝ流の時を
りて上ふおいてまつ。天下を風化ゝゐふハ義の嘉なく
ゆく人道の実風ゝ乃こんるゝうかり。日本を上代の人ゝ不
知不識三綱五常のゐこゝろふおこなひこゝ是也道究
なりかくれたく。中義ハ日本ゝ大切ありなゞ。そのゐこゝろ
教いまこゝおこゝゞ。仙佛ゝ日なふ功なくして。騙を招先
王道ゐやぶるまり。時運の否塞ふよゐて

りくこゝゞ天定る時ゝゞ。まこゝろく人ゝ物乃理なるんや。仏老ふ
亡失ゝら不ふよゐてゝ。先ふゝゞく。神代ゝ人ゝと上古
の至治ハ淳化なれバ義学の沙ゐる事ハ
へゞ。中義聖学ふまくいかゞ。天地一元の運を。午乃會の
初なれバ。天地いまゞ屈ふるべう。必乃れこと
を一具ゝゞ。天地ゝゞこゝゞ
利文丹日本をこゝろ
本れ四ゝ古利文丹乃ごくく。孔世を切くゝれこゝあるべ。今日
下とのゐふいてまつり法主なごいひて。佛老ハ天下ゝれこゝゞ
ゞべ。然ハ一具ゝゞ。四倍會歟れてくゆくゝゐへくゝの孔世乃こ
ふいて安こゝ仏ゝゞ。こゝ。孔ゝ悔くゞ。乃孔れりふ
しゞ。淳朴ゝくゞ。ゞ乃ゐ乃ごくゝ佛老後世ゝいふ。仏

と信じ奉りて。舍利弗毋目揵連を本として。舍利弗毋目揵連
ひくこと。舍利弗毋目揵連入滅して後り。今釋迦(ダ)牟尼
佛あり。是ひく。必佛法終退をうらやむこと。いくばくしいくん
ようれど。佛法と壞ること。舍利弗毋目揵連を退もられど佛法
とやぶりて人ければひとりとしてふかとさとること。舍利弗毋目揵連を退
されども。孔子莊周孔子と信ずる者孔子の乃至ふかあるう
とおりのゆくたり。天下の孔子と信ずる者孔子の乃至ふかあるう
ぶ。孔子と云ふく其邪と正とをいはなくしてふかとさとること。孔子も
ふ退て大道とやぶるふかとさとること。孔子を我れ一我れ
亡びて大乱をおこすべきこと。孔子を称ずべきより。秋也達尤も要我
の佛をくこと何ぞ其名をおくまんや

乘書略。中夏と天地の中也うて。天氣ゆたかに地精ふかき方
位なり。故ふ万事万物此名人あり。東西南北うち殺
分乃理なり。東西の人も。皆と義うて耳目口鼻を
同のせねそのひとしくは物うこと。天乃のなり。ふかうち
たりふことと知てさうりうれ人も。聖賢と師うて。日々に
人も聖賢と師うて人ぬ日々乃人ぬうを海うれる
あり。義あるうと以てとうれうとと以てれうて生うと
世乃推智に勇れ徳あるうをやくとうれうをを向なりやよ
うて四海乃師ふそうふ。天理れ自然をい恥て。而戒の佛法と
用ひ吾國れ外を教て。人乃主人と称ことを教事をい恥ことを教ふ其

あめまうら成之〳〵

一　来書略。伊勢大神宮あめ佛法は出家を近付
ける事。天照皇大。佛法以前より神代より也。佛の名も
なき時より。皇統不正と称ふ法をあらそふ事かつて不審也。
かく。天子ハ神明の子孫也。佛法ハ西方の名と称して近付ける。ふか
き事書略。称する中より名を。不正と称ふ。ふかし。程以不正と称ふ
ておそるべし。大神宮ハ。佛法を禁中より。
ハ。佛名よりかろんじ。遠ざけ。
近付ける事ハ帝王佛法を始と行ひてより所
免とかうむり。系内社ハ。
ト上杯もかく。又神霊ハ古法まで。ふかうすハかりざるすべ
てにてもせば。大神宮より。古法の残りまでふかく所存ひ

神と帝王ふかく又大樹佐原卿大臣ふかく
ける事。近付ける事ハ。不常
憲ハ。ハ。佛法ハ。ハ。
法ひ。重代のせつ。
ハ。神話ハ。
度佛名と始める事を。
ふひ。云々。今ハ佛名。過
もふくひ。大名ハ。
のまさるをハ。
一　来書略。
しまつ事を。

過書略まごなひれはをいふみもあるこゝろぬくひ。神農は醫
業の法をはじめ百草をひとそひ業種は神農ありてたゝうわて
ゐんよりとこゝろうおひ。おうれこと色〻朝夕食事をて支用て
給れこゝろなきものをさゝられこゝろふおうけのへとそれまち
大病といやしぬ。生死を定ひ。食ハ我仮ハ物ひ業ハ我すのをてう
事ひそぐ徴妙乃神理ろひなり梅をはふ不入ともも
ひたまり物れこゝろひおく相もる八歯はおてぞれども歯のやうこ
ひ神の通をひ不なるひ。病ひなへことふなつこひたり日なれ
ひ〻。ひ病ひ醫業れ方をてこゝろ仮業をて大方は医
乃醫術をて病を療治てこゝろひ三種の明神又条乃天神義
そをてまりこゝろひの醫術をてる先行ひ〻り今ひおひ伝
てゐれ元ひ中は神代の遺風あるもひ元ひ

過書略邪術のまこゝろひおう〻そ病まち病をいやしひ
信をう〻てをひ叶こひ仕うみこゝろやうみ人ひ
過書略悪物をひぐ〻用れてそれ功ある事多ひまし乃毒あ
物もをも焼あて薬に用しくある。血あをハ用ひ蛭（ひる）をひ
ひ我のごく狐狸（きつねたぬき）乃をくるこそでも。又を邪神乃座ろうる
めくも一旦用て益あろへ用ふべくし伝伴をあしくし。
まし我用て病となてまし〻をひそまし〻をひ伝伴てそうひ
ひ者をなくひ。物をおれおとこゝろを用て我あうこゝろれハまくひこれ
こをも君をまあ〻ハ我乃事ゆを邪術のをけハをのこゝろ
ほ〻くひ人のよふおものく。ゆをそれをひ。漢乃高祖ハ文盲
なる人ひてひ〻てひ。匹夫より天下をそれをの豪傑（ごうけつ）ゆへ遠来
の醫師ようおひべ〻て死をまをひ。問よむうひてうくく

仏分別わすべからず

一来書略。先儒仏の事は人次第とは云へか不審なることなどいふ

返書略。通わの世ゝゝゝ

高の老ますて八婚姻と通しかたき八法いまさるとう
きをいへども又古の法ハ婚姻と通しかたきハ法なきにあらず古ハ父母ハおもきこと
人情のひとしきをもて父母ハ天下無法の法ありて父母
さまたるゆへ。雖父の喪八大義の喪ハ夫よ達しかたきゆへ。喪法ありて兄弟伯母姑も
こゝろをもちゐるにおよばず。喪法なくして兄弟伯母姑ハ
路人のごとくなるゆへ。喪法ありて服なくして路人ハ服
君統のごとくなるゆへ。雖兄弟の親と
いへども服なくして路人と服ありて親のごとくなるゆへ。
ゆへにむかしより服ある
ハいまだ加へざる前ハ。兄弟伯母姑もみな
路人のごとくなるゆへ。ほゞ世文明の時よりこのかた

同ゆへに婚姻ありて服といへども。古世といへども婚
姻不通の法同ありて今も天下ともに
極親母等をのぞくの外ハ服ありて
ハ不義なり。中義ハ父母ハ
同じ。同なれども父ハ
中義ハ父母ハ是ありて。物生ハ
のおのれを用ひ。強ハ
なハ小弱をおかす。
重ひさ遠ひさ達を
ゆへ。斬衰の初となり。
つゝく。半ばむかし

ちゝおやあこそれぐも法ことなて後とうたゝ。不義なり。其へ不義のけうとていもうとさなり。婚姻の理をあやまりくゝ稀へのよつてさなり。平。婦人食をくらことなれ。食せされとそのハあくんぬ。稀のおもうにつくるめいめんばとのたうに食さるおもくなり

一　素書略。日本。道家学ハなくしよ二教くひとなり。

返書略中夏おゝて道家の後黄帝老子をもつて一流とそうへなくして仙家の流うおうきの。世くなくなりぬるよりなり。仙術とおうひまつ。長生不老とハ家して仙法とそうする方役となせうぬ。仙佛と合しうる。そうとつくりうる書おゝと宮海と云坊主仙術と称うてかくりあるとと記せり。枝祢乃と亜人の道とハあるとかつてそれぐ同くく人通ふて三胴の常乃ごとくよし。そ多小き地蛮迹とうて佛ハ合しやすけハ。非なり。宮海が仙術の称ハ仙術乃とそうするの多し。其外七々の法門のかくとく。仙家の流なり。今時世人のきるる道服を仙家の服なとうするものなり。道ハ其ハ服なき処ゆえ。その服とうふまいまぐさかくれうるのまゝあり

一　素書略。人のゝハ貴老をうて江西乃号のおあくぐいかくをは西ハ学ふへくも江西乃号のおあくぐいかくをは西ハ学ふへくも江西乃号のおあくぐいかくをは西ハ学ふへくも

つとなさゝるをもてそのびいたる時ハ大小をとわずくいてをゝ今ハ大よたゞひとへにくるしみ時ハ義論強勿かりかゝりなきをもてハ先生ハ此ぐまゝにてゝ德業ハのぞみをすむるの日新ハ学者の心と常とせん其ゑまれ志と。德業をなさんとく其時の学ハ今日ハ昨日の非と知とうつる。愚ハ時の二字の間と常とをもて。学ハ生ハ非ハ志ハなきうこと。先生ハ生ハ志ハなきうこと。朱子ハ後之君子ハ語と。卑下ハ稱と強をもあり。早下ハ稱と真実也と

一

来書略。室洲ハ水なきをもてあしとをゝ塔ハさ山中おゝ。塔ハ井をゝ井をゝ塔ハ民の飲ハ水あるところゝ。道理あるをもてハ井ハ水なきをもてあしとをゝ

ありて出るあとくいそれと同じく後立ておのづから
をおつへくいむそーかんがくいかへ。井湯とく
ものも。地獄と思ふ。又地ハ五をおいて。水氣をふくみと
もつて。名水いろ花をひらかしむ。室海ハ切ニ付まさうの仿
うん。室海ハ後寺持くと威しかめてそもそも名物と
来般の客ニ魚ニをとらんとて人数多ひへくも。も寺特
ふの一ニてありきるく千ニ魚ニそ。惣ニく飛法のごとくか
くれおくおく。そん成かご殊勝なる行者ニて。寺特ハ
つてもおくめ寺持く威しかめてそもそも名物と
思ひくく。其中

くうの咽乃かたくみとひとそんてるめんくして賊
れ安くおのひとそんや。守敬と幻のれおくをひてして。そうば
そうてあひて。そうる形ろくだ空海に於こうそたたろう
守敬といのりろうーそるかとつり。佛菩薩とつおをみ大
なのそくてをなさかもれとなくき沙老
といのりろとくあくこ。さあうなのがまんぎろい
の坊を乃方人をる神かくひやわくん。り実るくそ沙
しくよおるさつひうして邪人なるゆくよ邪神のやう
てたとけするなりべし
一来書略。真言を授唱く。虎狼どくやのそこをもまた
うと魔おとるめれさくつためり多り他いう
返書略それを真言すかよおくに不動公のかうち生

付臆病なる者ハ空海の大事乃偽技ハ真言を教ひるも
甲斐あるゆくこひ生付をうげうて愚痴文盲なる者
ゴ大事ハ真云と名付てそまの同志乃名もを恐よ
ばぐもとーへひくひく稼よおて治くさおるとも。頭をり人へ
人ハ万物の霊なる故よりこうこかとひへし。何をのも宮
もる事をるめるのそひ
一来書略先日何云ハ人身ふそう巴ひとそ。そん懸の玉と
治親しひ由義及ひ空ひ。質任をふかるめて
てあくも。武勇すくれ
返書略日なを小国あて。貧乏ひへて。秋の空ひ不ーくひ
是ハ幻くて古ハ国法検幼非系うて。仁義をねこ。文よ遊
ひ武と勉めひる武士うる者ゆ。国の整置してれ

ゆゑ町人の招よ。轉（ウタヽ）も免樂と事とをくゝ人撫のみ
も。名殘なとそくゝ安とゝあるゝ。小身い山野ようけつ
寒暑風雨よ身とゝあるゝ。大身ゝ軍ゝて試ひとゝ
つゝ。奎ゝ八獵の通とゝ光のゝ八表通よ惜ゝゝ
しゝゝり。愚拙十六七ゝ弓付をそふゝゝなへと
そゝホ他人のゝゝりゝ。進退不自由なかとゝて
ハゝかゝ身重くそゝ武士乃達者ゝと成ゝかゝいふ
ゝそゝぬゝゝぬやうよおゝりひとそれゝゝ考とゝさ
て寢とゝ美味と食をゝび。酒とあすゝ男女ゝ人乃紙絶こ
ゝ十年なりき。江戸ゝをめゝて山野ゝゝゝゝなゝゝあよ
てハ。殊ゝゝひとゝひとのゝ八おうゝゝ称つゝ
の中ゝ来カゝくゝ後と入人ゝゝまゝゝゝ海よ廣庭ゝ

人乱なゝゝおよあゝく。閑ゝよひゝゝ兵法をつゝひ先のの術
おとゝゝゝゝゝゝかゝゝゝと。人遠ゝさ面のゝとゝをゝりゝ。
ゝふゝん材ゝゝ考ハ。夫ゝ狗やいざゝりんゝゝゝゝけよゝ是
ゝ三十よゝ内のゝゝゝゝゝ。なゝゝゝゝゝゝゝゝ
夏のゝとゝゝ。夏の暑乱よとゝ。月中よ鉄炮とゝりゝ冬
よ出ゝく。雪雀とゝゝ霜月極月ゝ雪霜とゝて山中よ入
ゝゝゝゝ夜夜。蒲團おゝをゝゝゝ。ゝと海のゝゝ兵
上ゝ木綿袷かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。挟箱一ゝ荷をゝるも
羊ゝ提紙書物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

也家乃用小えべきことなれども我ゐ〳〵よくあ
いなよ。せめて日本武士ゝ勉なりとも可仕ねいく
永職じうハ心乃おこたりぶかざを仕のこ。身と壯くあつひい
時ハ今日あすと老多くいぬ十前後大病切こ病
おこ。ゝ上いみよう病。右乃脩といこゝゆへだ。に強こ馬よ
のこ也ぐ。うひ也ぐ徒も不自由ふゆへだ武士ゝたくあと
こゝゝまだ有りとうひて。陰病のこゝいぬ人乃也こそハ。右の勉
をなこゝす。其上病気こて体もるひがこくゆ斗ふたくふ
実行ぃ。今も翌書読ゝ斗。無油い科等ゐく病
者ゝてうもそいこてこゝする者ゝをなくいき。也ゐこく科等
乃せこゝゐこなりこゝも勉て。こゝよふゆこうあゝば親ゝと
仕向こゝゐへこも。依こゝて何乃心もゆく。夏も用ふ
こゝすこゝず。そゝ実験とこゝれど。昼夜わこゝかふあり
元ゝ厚味とゐこ。頭と
軍陣こて寒暑ふあこゝりいぐ。こゝ病ふして。何の用
ゐこゝこゝゝ。日本の武士ふあゝば。雪不雪ゝ生村こゝいへこと。強弱
ゝ老こゝゐ。日本武帝ゝわれたなこゝ
こゝゆこゝ病気。ゝ孔明乃老ゝ強なる身ゐ乃
ゝび〳〵。公家武家添こゝ同ゝ流こゝ也ゐへぐも。こゝて
こゝて強弱こゝかこゝゆこゝ武士ゝみこゝも。二代三所ふか
ゝび〳〵へで。町人の心気よ極こゝかこゝゝ。奢よなこゝいて
世楽こて幸こゝゐへで。文道こゝ換こゝて我せ
こゝのこゝゝび。人乃こゝ所ゝて地こゝゝ。也家ゝ用こて

そ之ばら之。回家ハ我と為ぐさるのハ
一未書略。我等ハ儒うそ之ばら井うそ之ばら次。世中ハ儒者
の佛者ハ之ばらとなりうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
小乗の法ハあとなりうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
ら。佛乃ともうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
ばらとも儒の素流ハ醉ハ。梅をかさりとうそ之ばら之ばら
ことば。儒者ハうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
者ハ儒経とひろくうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
藤井いうそ之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら之ばら
ばらや

返書略。儒者ハおもきをもうそ之ばら之ばら之ばら之ばら
ばら之ばら

文し。達摩(ダルマ)を佛あく。佛道の害成除くべきと人乳
ば。武帝いるなひび。終よ毒害せるまてこり。是を以乃れな
釋迦達摩とかくやまくへ後しておこさせ給へば。
今れやうなもあるなくひ。佛法を寂滅(ジャクメツ)のはうにて。隋
通なれど世ふ知らく政道よめりさり。時先くべきをのよ
あくひ。時めくゆくよ。害のこありく益なきを也。聖徳
太子十七箇條の憲法(ケンポウ)にて。天下治ること佛者乃ト事
なれこと。君とおもふしこうる大逆悪と知音し次ろ我
みも治こころれ給りかかるの乱世をあう向くひ。治と治
まるとこ。何と次ひや。佛法の盛昌しこるかとりそ
有べきひ。此の逆徳とおもく。盛昌とる佛法ありば。善悪
の批判こ及ぬこと世の有徳を通へ。兵乱の

あるこもれをふはうず君も賢悪ハ世も静なること歎も
らざるこまはうべひ。兵乱乃運ふおこりく。聖賢の君か
たまひ。軍陣のはを以賊と平ぎ給ふハ道とそ。此乃
初也。水旱飢饉乃運よおこりて。聖賢の君おはひ人民
乃ものやこ成をこひのよこと。
てそ。世平はくまが故也こ。聖賢れ君れこ向さ
後大平の時よまれ所よ。賢才おり一向さてを。其
る我楽給へう。其君も明智よ向こりのみこいこんやる昇
飢饉れ時ふこく。豊年の運よ通給ふ也。仁徳おこり
ものこでを。人民飢寒なし。聖君の恩澤よ向こりこひて
むやそこで。兵革おる我治こくひ乱世こいこびまこと歎(ナゲ)
賢成初こむをひく乱世れ拯こす。聖徳おこりひ

ゐをさゝれど已。爰を我一生所作の業と
亡しるゐハ。賢を祈こひ也。報ひなく善を修造ふの
ハ敎をてう。佛法ひろく人ゐきをひそやかに
乱逆ひ人と。聖座とのひ。治世とゝも愚乃如り也。佛道も
我思ふごとく。若釋迦達ゝ九人根ありて。釋迦達ゝ小法ばかり
こゝを修ゝバ。益ある時よハ害なるごとく
そひ。そゝ人の佛法を一人の人ありて八宗九宗ハまうけ
同ごとく再ゝ興ごとく一人ひとりといえんもおゝし。家と云
ものひごとゝあり。全体佛在世ひ時のおゝく。出家ハあれ共
法ゝそ。山号院号ひ負てうなり。戒定慧ひ三学全備せ
ゝ僧乃多くあつまりやうくひ寂滅よりてう
陰道を守ゝ。治乃よかるべし。世よ時めひて。せ事乃時

ゝ林の木石ふひごとく乱世ひ時ハ罪ありて教ごとく
のよ夜ゝ色ゝく綺言をもてあそび。乱れ夜を昼よひ
夜ゝ時ゝハかゝれ害れゝ。善ありてハ
わろへひろ
一末書略大衆ゝ諸鳴よまれ給よ。東夷の人なり。文王ハ畎夷
ゝ生れ給よ西夷ひ人なりがく勝ゝてう聖人乃ゝおゝ
給ひひ。孔よ中國ゝおゝ生れ給ねゝ天理なり
と云給ひそいう
返書略。諸鳴畎夷ゝ中ゝ生れ給よ。東夷西夷ゝそひ中
國ゝそゝ王都よ来ひ不ゝ。地平ふ。山ありやうりうさ
ありのおとゝ云てうよひ一夏人ゝ生れ給ふ。

三両八一年中のことくに入てかんぐくられぐ。くりあし
ゝこすい除銀有ぐく者ハ百人ハ百人ハ一人ハ一人ハ一

て心しるべき者よ。ゆくゆくまた命ぜん事あるべし。今までもつぬ事ありぬ。
へすべく仕へおれとうけうの事ぞと上よりさだめおかるゝ事ありぬ。
ひとりの武士ありまして、かゝる時にそなへ人の少なう
かゝし風俗ぞと扎ゆへ能く心得べき事ぞ。
一 家業職。能者の人招しより雁鳥と家業しく仕ふる多くは其師の術ありぬ。
是ものの名目ぞ。公ぬぬとのおゝくの人をかゝえ置るゝ事ぞ。
忠さうをつとめわくれさあかゝてゐ世の中武業なき事ぞ。
悪事ありよりの事ぞ。ちよかうをいるやうて川義。
いれの事ぞ。成べて仕ふと云れの難もなくて公
那通なる事ぞ。ひとをひいて利ありてまねぬ
いうい
返事略。雁鳥と祭礼事ぞ。人ぬるおゝく

取とるまゝへ。よ代の作よりあり。詩経うの人くうり
これ歟と歟とも云也。野蛮人成事ぞ。其実能
人成ぬて武成なりくうの。西嶺よりくはゝ。山民のかり。人数文
今となれ。常よ来かくし。嶺人士招うて神ひ各別よ。
かりの人身とりくうを小勢うくうを成うくうを
なよ取よまゝうくうありぐうー。
うー。この世界ともろ。民の苦労ともかゝへきうんかり。
倹約朴素の体も。嶺の中ぬ。古の法ぞ。主君を
うふ云のゝむ。嶺の通とあり。
業ともれをなくゝうれへ
ぬ。今ちよと云通をうーゝゝ

て文十余後の今もいまざ文乳大方なから見発の事九
外おくは四十余好より四の人中ホ自法はひ今ことをそ
称よひ。又六十年九間よ城ま世ま未世ま成ばくんやそ机て
分すくひ。三四十ほ以前ホ七の武士を。盲ハ文筆弓馬乃法
藝ハ服なく。ホも称ふさきり承ひ称うひな。何ホそも
人乃ま称事ホ不知と称ふ。三十歳餘まくホ方書ホ
も文。観伯又ホで知ホ文ま。盲ホ服
まおくいやが。今乃ままき内ホまるとうひ。ホおくハ
伯の称ホも嗤ますきさくく。真実ま称ふ退仕さんやと文ホ
おおひてを。行ままをなくくひ。ばらまらひ文ホ津ま日人と男
ま和望ま。書ま氏おくハ乳力ま。すくホ。ぞくれ花
居とういて同心衆仕ひ。ますて妻なくおくうひ。ぞくまふれ

ふひさ。空十ふうホ成て。ホくま孫乃ま文ハくひ。書氏もく
ひ元三十ふて安ま非書ホ称ふ。ホおくま。ホ顔とおくくして。
孫ふくまひ称ひさ今ま三十歳九内ホうひ者と書ま氏
求ひ。ま氏ホふくま。お書ま。ま
段ひひホ称士九姫ま文ホ君ふ乃賊ふくま服九ふて。
ふくまおすホ者ま。文武九徳ま心ふくまびのふ
くく一心くとひてガまふれまとひ。ま氏ホ
て成商ホふ。武精氣散ふて。ま分乃力ま。
き人ひ。空氏乃法九くひ。八歳ふり三十ま文ホ法藝ふひくホ
ふ称ふく風ま文提ふひ。ふれすおふ老ま文ホ
ま乃ふホまて右ホおくふ。ホ称ふ消失て
ひふく来ひ。ひて九称ふ者ま法士。称おふ世中おくすもく

書成めさりのくたい大二百九帋のあいきうを落書くたい和睦
とくげ。みあれぐまそそくそみくく。わらくをとらくぐ。ひ
ろくのなだをの低くくすま東あ。すたる人おまあ。すたを。要あるそ。
もくつ。時と達しの也。石北幹一頭一夕の板よあくん。世中て智
漸と始てくて乱くくへのくと。秀吉公天下成者八年故くしめ
るひてよりこれくく。六七十年の間よ天下九風くの如くくく。
大ようく落てひこれ天下仏さくさ去一たり初をく人
北まるく事。文毋北氣血とうをつくく事くいひぐ。天地の氣
質とうこ教事。第一たり。天氣八地の考不筆のまくこうひ近
年山澤次第よあまて。神霊北氣うすさ故よ秀才北人生
まかくひ。世智を以事もの中よ也帋まい

一　本書略。地秘中北抗中世を。
くを伝也くをもりくく返世の

周られて偽るらくまと故文育の名女なこて伸ぐ八
それの武士ある者なくく書成よ風ある人の書くくハをそれど
もよこと通理を難色ざるの初なる紀附分よを周習ひする
事なを見ると庶ふまる氣味あくくひ。むぐ朝よ降くくを
さくる。会伴をそもをハぐるよ。まあるを悪人
成をを明白よ能承度北返書略愚痴なく人を通理を況安也ひる。(ママ)贅(ママ)とあのめて文
章北見物を要へ難波なくくを。後結の変をなをぐおくく
とこりひてを周知色うぐ。ぐ。九周八茶北ものとおくくべ
伏義の皇天地人三極の道と教は一先法よ。九この一を
太極うかくして八く我ひくく六十四とるく事多物北理
と色く法へる。軒轅の皇よる北法を明ふ法ひてう

真淡乃數若算數と作くく春夏秋冬の氣日月の融通
いそろのでがくも天地大なる一分と云へーめた
くくバ人ハ一分ありくバ一毛とうんがおやまりくいそろーな
ますが氣形農乃君華才ありくバ醫業ハ本とかあく醫業ハ本を初のひで
もう。其淡數若人の一身と天地の大よおいきく初義針茶方
なん數ると事故ハくろ人の身と切刻ほぐくねまる血ろ風
これ都てやまれるこの如。吾れがく道理をいく初るまて
一毛ととうがと。一分とおやまれ。脈時経絡ハ通とるまくれ
此重人と年人と壮令ハ一分ハ一毛とひく。それ分ハ初るまれーを
くぐも。其分量ハ大小各別なるまありたるくて山の井ハ水と
汗海ハ水との分量ハ一ぐくも。水ろうろ初ーとくも其ひ
ろくさうがよ。大奥小奥とをくく毎とをり風邪をおくーて

一間の室中ハ一分ぐくも。聖人の心ハ大虚乃空中ハ一分ぐくも。
中ふかろうがれるも。出一間ハろうーく少ととまろくく風と雲
天地乃室中ハ日月星辰かくと風雨とれろくも。寒暑
昼夜とれ。神也乃如ハ所ろ言語ハのべくーる百千室中
山ハ井ハ乃如ハ所ろ言語ハのべくーる聖人ハ其ハ如ハたぶ
つ語ハ所ろくーく。一神の理と云ーし。同根の性とみちびく
て聖人ハ云聖人ハ云ハ三綱八常の道ハあり。其分量ハ廣
大ハーそ人の不知不識乃如ハ自然と至極とまろくく次
氣藻の氣ろ。死生とうんろ。何の難ハ初ろまと昼夜のーく。何の難ハ初ろ
ろんの此 廣大云量乃大ハ云ハ天地一同ハ人のよ
人の一ハ一とおーそ。此獄乃筑と佛ハゆづりまべくぐも見

…をおこしてい教をしゝそのうへ天性の良かわらて。
悪心多所と心善と思よりそのうちのく
秋也阿弥陀乃ぬそ是ゝ行ひくまゝとハゝそゝひ
ゝゝむれ所業願と。能のせひあゝ。其ゝゝゝゝあゝ
天性をひく不仁有欲とをん。殿れ討ぬれ時の八天
下れ国ゝあく悪事をゝゝゝとかゝもり。身八置所あゝゝ
其八将討王ゝ都よりめつまりぬゝゝゝ其ゝ悪人ゝゝ
人とゝゝひゝゝ悪人れ分ゝゝゝ乱よりゝゝ。天下取ゝ天下れ
悪人れ主なれ。悪人の分八時代得ておゝゝぬ所作悪。教也
ゝ備とゝゝをゝとゝ天下れ悪人れ棟梁と天罰ゝ悪ゝ其
とゝへゝゝいよゝ所作の人の善悪ゝゝゝゝゝく今教也
除治ゝ悪と人とゝ其ゝゝ人の悪とゝゝゝ事とゆゝゝゝ教

也仏仁とゝく為悪ゝゝゝ悪名也阿弥陀ゝ善
善仏ゝく。放逸声真と誰ゝゝく不死れ人ゝゝ
と悪人の大将ゝゝゝゝ其教也ゝゝ教
ゝく。下れ所をれゝよゝ。其ゝ教也ゝ天下第一れ罪人ゝゝと
ゝゝゝくゝゝゝゝ我也ゝ善悪ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

と云天下なん人ありとも我をそしりわらふ人まれなるへし人の身中小人の分わるくと云天地の中よりくらいくだりたる人通例こひねまハぜひ英雄をえらひ仰ぎよハ天下治まり天下国家治まりハ人の心と同くなをれりぜんすれハ仰ぎ従ふものなり

一来書略。これも事ハおくまもなく義帝とさへ通家をなされ給ふ。老子も。絶聖棄智の教ハ天位も釈迦もさへくもうらやむ所の釈師よりそれ以上ハなきゆへ乃ち天竺国ハ天竺国ハ人ぐんぐんとそしりのわくなくハ仰ぎ従ふものなり

返書略。釈迦より聰明の人なく中国日本へ渡らるゝものなし

元祐ようて新よりはれるうらやましく後生畏るべし。今此堂寺のかたちハ日本ハ中国の八相應寺ハ至人と師とし。日本ハ人。ノハうちと雲悟。仏道ハたゝ人非道よりハ仏人をしへくまゝ学ぶべし。山林と住ハ仏寺ようく。山林と住ハ仏寺ようく。今此堂寺のかたちハ日本ハ中国の八相應寺ハ至人と師とし。日本ハ人。中葉天竺ハ日本ハ百も合せても及ハ大国ようく。堂地多く山林そゝ如しかゝ大国ようく。山林わるき所ハ人を国ハ移し作籠と。出小国の堂地すくなくようく。万民と共ハ迷惑をかけさる第一ありがたき事ハ。ある人ハいそがしき人と。日々ハ遊学ハ教いらず

一来書略。老老ハ天下ノ大善ヲ作ス。佛法ヲ退キ玉ヘトイフ如キハ。佛法

ゆさぶり。往ゆよと紀人多く儒ある外あかつハ何程ありしるとも。ゆさぶり。威を逞しへ。儒ゆよ好人あまた出来ゆさぶり。往ゆよと紀人あまた出来ゆさぶり。往ゆよと紀人あまた出来ゆさぶり。往ゆよと紀

それぞれの分をつくすべきのみ。其の外は天命にまかせて、学問をする者あり。農を勤てそれぞれの分をつくすべきのみ。

一　未書略。我おとも出合は門人ふるまひ学問をする者あり。農を勤てそれぞれの分をつくすべきのみ。

をいふ。何ごとも受用ありて、乃ち書略。君の学ひらくべき事をいやしめ返書略。君の学ひらくべき事をいやしめてゐるなり。

乃ち書も。思ふ所書も。同一素朴にして、其の外の物とおもふ我ものとおもふ所もひとしくそれぞれの分をつくすべきのみ。

京都にて言ふ人ありし。学問ある人は、ひたすら学問ばかりして、外の事に用ゐず。ひたすら学問ばかりして、外の事に用ゐず。

より出でて家より出でをいふ。幸に文学を業とするあるべからず。

ゆゑなり。物産をおこすべき事なり。

学問人の用を達し、門人ふるまひを和睦し、朋友を助くる事なり。

是を言ふ。なんぞ其の人を籍（かり）て仕ふるの外、物産をおこすべき事なり。

庶人は業を勤むるを能とす。我も同じ。商ふ人は業を勤むるを能とす。我も同じ。

道理を実践するを能とす。百姓は農業を勤むるを能とす。我も同じ。

好むところ。学ぶ所人其所人といふものなくして。

学ぶ所人其所人といふものなくして。

もて。皆人各其の利をそこなふ。家職を勤をおしへざるそこなふ。

居をせ。云爾のあそびをごろうをせと。依人は理直去と仇をもくま。職をよくまふあり。人乃ゆをえ利あるて財の者餘をなさ八可なり。百姓のあよ生れく。田地あるふ。みな農より業多し。農人は業は分を入くころ八荒蕪(キャウレウニ)れ民さるおもいを。遊遠(ヤシヨウ)して田よろ入留に転(ウツキ)まる。よ長を去ず。耘(スキ)の柄よもろまくこまる。もろ乃いさたよくして。万物のよのひやうれるそのひ八天地非明あを私へくを況人よをしくやむりろ。し者肥る馬よのを。人多くつまく。苦くき神てもは八児女のあれをひもも。基心根八妻妾まつる。よくろんのやむへう況市井の倍と云く賊きそのまとほてハをも乃利害よのをあつまく。

仁義かけを八なり。ず八市井ゆて。公八賢士吏士とおそろ
へき人多く八。垂士とも沼着れめ。百より賢者れろれ
百を農商なり。行て其職を。拘をうらてふうれ住へ。況抱き。
人これ学にまるものハをうれ。況抱き云ものハ。実八専業よ
してのかハ乃者の私よりひかやしく通まろ数へき万八。者ゆまへ八。荒あ云おとハ名別あり。
言行のをうあとむりうえ専業てろく。学成物ある
ものハ生れつき文才は器用ひく文学まれくいもの
成へし。連行をに雑(ヲリ)すきいろてく。又八町人社賊き
職をいくし。学向てよれ者ろ更をず。分をそろへきあ
欲よ。このむまあうを市井の利公ハかくくまりてう

こゝと農にようて学ぶのこゝ礼は同一體去ハつてをゝうて、かゝるべき庶人よぶ合ゝて幸ふれをいふく早下して已ゝみよもくき学ぶとぶようて。其信よりわゝれ分をきゝうり庶人みて武士のゝゝ我仲ものハ行とゝくゝ吉凡乃法よ入俗ん也道ハ俗名俗乃みてゝ志実よ道に志ある去ハこれよ異ゝう。釈迦ハ王乃子よ生れくゝれ学問修行のさあよハ人間界一乃やしき去れ。人よあるゝゝほゝ。元会よりうゝた下の類ゝりて上ゝんと敬ゝるの務心仕乃法を滅一分ハ人共下にゝくゝ。心ハ万物のよのこのひもゝ。ほゝゝ小我執のゝか らゝる。日本丸出ゝハ人丸よ在ゝる我ゝく第一乃倫是ゝゝゝれ学ハ人よゝ成ゝるをこゝて学ぶものゝれ人乃

又ゝうよ我学ぶいゝゝて、ぶゝるゝゝまゝのひ師ゝるゝ学ぶいゝゝて、弟子ゝうゝ事よ学ぶゝ。よう人乃又ゝるゝ。よう人乃弟子ゝゝるゝゝの。成ゝ別ゝくゝいゝくゝゝうゝ人乃弟子ゝゝるゝゝの。今丸学ぶ名ハ農よ在ゝく農を安ゝ商ゝく商乃身ゝゝゝゝゝ欲ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ徳民乃法ゝゝ多ゝゝ。ゝゝゝ寡ゝ頑徴乃輩ゝゝゝ。ゝゝゝ書ゝゝゝゝゝ。

一　本言昭武道ゝの門よ小方中方長方ありすゝ

十久等の紀律最方あり。さ
つまらぬいや
返書啖いつまでもよくぐ〳〵ぐ〳〵
うるさく世ら話我よ同〳〵
知つてゐた打ある人ハぱつ〳〵乃ち
次第に引ぬきるらよ〳〵。よ
ととやくするものハ小方ち。
賊を切るハ中方ち。大
衆れ方ふう〳〵たるの仕者なとをそうふとほく
小脇指ち。大組指ハくるまよ利あり。中組指ハか〳〵
おもれよ利あり。もうまた大人
よふこゝろ。ハ大抵よい。一様よう〳〵ゐる場合

なくいく戦よハすれの長きさらより。且大きの物あり。私
軍城乃まにくかけひきの利とも得。方本刀におひて
往来れさとゐ。自由なるものハ十久等ち。
きゝのハ本刀紀律ち。
よハ本下淡別が夜羽別綿
く詰三乃手れす綿を用
連ハ仁のをよりもをあくたら
ありそよくい跡て世
引ふうもあり本を第一ふ
やとれよ心を奪まく。我
河江戸男ハ胸ふ小筋を
ふち。其本ハ男ふ活

一未書曉。出家と云婦と八日にても。人乃かたちをも。飲
食男女乃歌を学ふ事をもわるるやうに。六八佰とをいやしくもふるまひ。
過去を暗。出家おこなひをも。持ち。其潔き心
きよ
きものあり。男女共歌うたひ。舞をまなびて。飲食よりかた
ち。学ふ人おほくあり。学ぶ事ありて。飲食の
ために。我躰をも。やぶり。病をもまねき。ついに我命をも
うしなふ。出家ハ其ことなし。仏法をまもり。仏
なりおこなひ。学ぶ事ひろし。名あり。其ものの
女ハ自然あるゆへ。男女ともに。多く子孫あり。学ぶ
人おほくあり。仏法ハ滅することなし。それハ滅することの

也。八坂瓊之曲玉を奇特しいふ。蜾蠃のごとく。能く我の子と成すと。卵が子と化り出る。或ハ浪世のつねの事なるハ。況や神聖の人の子を。蜾蠃の子とするも。男子ありて。法を立るといふ。是をもゆるす事なり。女ハ不潔の法なまじ。出生れ給ふ。是ものゝ男子もうら。順次第を法るものあり。西氏の西極よりうつされも。氣化よせ一事を。能く小兵よハ及べからず。かしこきせんつきを自法して。大なるもの。せんとの事なり。飯合男女の歌あるさまの。野遊よりうつされも。羽蟻の雄雌ごしき風を。長ずる事を。

一　日本書紀今の世なり。軍法者ハ多くいふ。軍師よりうつされ。今の軍法ハ。百人の九十人余ハ。名をも知ず。況や法ハ。たゞ方法ハたゞいふもの。軍法ハ。もとよりいふ。軍法ハ。もとよりいふ。軍法ハ。もとよりいふ

經後の宿善なり。扨く後悔ふかくも思ひくいる
我如きく人くをも思ひくいるよ。人々各〻一服々々。おのしのかゝる
義經いもとれく雪ちゆへ。書のそしりたれかゝ
罪をくもうくの人々。そうまて
ちんくいた大物よ名法ありうの
て。平家の作う前くさいのくの種とうり初ひ
うとれうみく。大物のつきうかとうて
けいさせれも。はれなく病
ゆよのくく。宮よりうほうて
やれる人あるよ。もよよ事氣とれいてきり会乃
それハ。多數乃くらきあるのよう。別義經を人くき

ふ。ゆゑに義經ハ大勢れ多をあり。さゆうち務員ハ利う
當用ちうでそふ又そのて。七書をひくまゆよ。その將ふ
ふうり。てふれ事氣のくうきまそがのうる人うち
一来書略、今時古の重賢乃ゆ
一て。私ある大先乃當をあり
いてくいよく人を連一よ
返書略。其歷教ハ事實の
うのハ委しきうみくに其圖うのハ乃ねよかかをて
も。人のうくさをある人くおうり
如先うち人くて。是非をうみくいへ教と當くハ
別くそうものよい。別うハ教ハ重實の作うそハあう
ふゆへ。おいく圖をハ仏先を見ひ。或ハ我利にをうの人々

仕ル圖ハ一枝ヨリ數ヲ
ヲ以テ一ツ一ツ先ノ
ハ乃至幾何ト。民ヨリ
ヲ實ニ乃至ト云ヒ
ヲ乃至ト云ヒ。古ノ
ハ乃至ト云ヒ。
ヲ乃至ト云ヒ。
ヲ乃至ト云ヒ。
ヲ

にハあらそひ沈の中あれども。中和の氣ありまれて。天地中と
云ひたり

一条書曰。世中亂まむとするにハ。人よ孤乃ごとくに。奇おを
てらいと。承るにハいふ所なり故にそいりんや

返書曰。上治の世よハ。天下に邪神もなし。孤狸といへども。
妄りたる獣ごとくに。中治の世よハ。邪神獣よやうやうに乱世よた
よりむさくハ。邪神人よやうやうに孤狸の人ともまくいとを幸ハ。
ゐまゐてあさくハ。人ゐ人をまくいとるハ多くてうくハ。或
ハ愚ゐやうにて陥いとを者ゐあり。或ハうまふようにまくいとを
ものもあり。さるによく邪ゐあるごとく人を陥くいとりみハ。皆人ゐ
野ごの孤狸なり。奇おとおもハ。まよはの邪術
なり。是もまくいとをまよはされ陥きいそいるゐよりて陥くまの

りと者。甚害甚一。み名利よりく陥くいとを者ゐあり。人の
ゐ大なるごとくいへ指くいとを分別裁判。出来りのごとくい。
放に世乱いりんさくハ。先人ゐを陥くいりもの。後多出来る
にくし。是をいく重人ゐ乱ゐを正くまるにとを。
先王之令甲

一条書曰。傷害をくよみ。人よ後続まて仕いるもの。あ今まて異
論よもらい。喬木を下て。幽谷にいりんや

返書曰。人ハもり心の激くきおいき。書をよみ。幸ハ文
才の思ありまるふい。陥いるをもよい。又一人ハをゐ
吳学の我儘をるにくいおるまくいを喜ふひくおるごと
まをもくと。さくま陥ゐよりていき。此事ハ氣狠なる

へ儒ともよ正ありてのまことくい。儒ともよ法ありうかくいて。人も仏のことくそいて。仏よりくく仏法ありハよりつよくそいて。誰もうる先ア。まこと悟道みか。万事まくく。平人よりも我まくたるものそれ。彼ら仏ありてよ。仏よりくくいて。我まくとせんとのまくくいて。儒ともハ人をハ人みくいて。法世ありまくけるとも成へきうそ。仏よりくくいてもおうくいて。儒よりくくいてもおうくいて。ちくめ人ありてよ。ちくめ人乃ちくひやくのこ。

一

来書略。古の儒ともと。今乃儒者の名ちり。和ありく周官よ出ちり。返書略。それ儒ハ古れ官の名ちり。和ありく周官よ出ちり。卿里ありくく人よ教ありハ乃藝を私くくともの之儒ともと。

つ、まこと後儒官史官相遍てるり。史儒ともいりくとりよりり。物儀とりくく業成ちりてりり乃徳ありけまても。博ありまれハ周官よ出ちり。と達と。儒徒よ小人乃儒。君ありれ儒とあるありをられ。儒ハ文学ちる者乃称のてこ。大人ありれ。儒まハ文学して乃徳を主ともの八君ありれ儒ありり。ふ体よちちりことものを小人とすまハ。文学して産業ちりうことものハ。小人の儒ありり。今時儒者くりよ者ハおりくハ小人れ儒ありり。博学ありく福をうけ。国那のまれ用を達をれハ又史れとしよ。放よ天性文学ありて学ハ東ちるうもの。史儒と称く。称とうちるてりりてかちるりり。已を知るものハ明ありり。いよの儒者ハ已を不知ちれもまも勝ちのてあおりるくりの者ありの人の儒を明言せるりて。儒ちの行ハかくいやしきりて

いとうるはれて。乃徳丸罪人たちの芸しくハ仰のそうつつや。
礼楽弓馬書数乃六芸ハ古ハ士人乃芸よ芸ふことの
と挙くく。儒官よりとをまくく人よ教しめ。士君子と助しめ給ひて。
曾子曰。邊豆ハ有司ねせうしく。曰事の儒者くこゝろの
ハ。六芸ともちくしてぞ文をハ長して。放事をおろかゆゑ
おそたち。ろうまとも此一事ハ主しめ。士君子の人情時変を
かんくへ。国家の政をとりまつりごとをする人きことこゝにありて。こゝろ
みへき徒よとり。笑へき徒をうけ。己りよりあよろをいひこと
さりて。士君子の才をとり事をハ古の師儒なら
らん。尾列乃亜相。ある時の儒者よ向ひ。ものゝ坊を
ふとゝ。いつかんとおりしの人ふまとをかくく。

ゆくふこと人ゝとゝまて。まことに妙香院の法ハ儒者ハ
くおりて。実ハ商人れりやしき乃根ありくく。かふハ
感とりきとれて。人乃ありもとうも也。人のありこひ
ハ。ありてぞのまかくまかくとゝ賤しかく可ちて。日
ふくくハ先ちはまりくく。おおれ人道のこと
古道三ありく二三人出ありとうをく。

ふくくハ先ちはまりくく。おおれ人道のこと
古道三ありく二三人出ありとうをく。

乃俗と威一ト云。大河と云ふ方も皆一のもの方
称す。まこと大とをかたり。芦辺川その外川
筋其数の下流と異也。もつとも異なりとおもふ
ことなかれ。我山賊よさきり。大和芦辺川。
伊勢国宮川。此三河のみ大水の異名也。大
日の時ハ。山系も晴天なり。三国のうちかうと雲霧くも
まるくみくも。山系の雲雨暴し。他ちうと異
く。雲のこよを洒くうこと。霧孔深雲の簸ふうこと。其
よて登降ひくこのうち洗くこと。大雨よ
とまされこと。但ハ天気晴くも。山系ハ雲雨の穿れ
を其度さ方一里ともうたり。百ふれも雨ハ。

一素書曰。天度其時。地度其財。人度其
ひとなく且其本にあをこと。
あり。このあをとをいへ。かくれと
いへこと。似合ときそこをいへ。光のかうらうあれはうと。
ハをもこと。かうらうあをこと。かけうろうくいこの事よ

えりのあとまで。此風よハ
吉井川乃あをまで。笠うへうりくハ
ゑより陣よりあとを。是ハ
こゝまでと白日のはしくりへ
その陣乃東。萩乃上
とう秋乃ふり。是ハ
のあり同比乃。吉洞
とゝうして。遠よりそ
つゝまくとりて人のロよ
この木乃ふ乃ゑ乃ちゝ
ちうまでも三十日乃ゝ
そゝうのあよりそゝ

れそ。ゝ流をとゝうきあり。南村
国をハ乃運上多くしらのゝ
川のふあり。古人乃ふあ
らし。一旦の利を含うゝ
かくて世中立うゝ。
うれ柔除のおそ
めをハ軍国乃用
矣堂寺の奈とへ
ゝもり。川ゝ
おまふ人ゝ

て開よ立ちて。事あらバ人よりさきに。今活
國よりおくバ。其大忠あるべきを。其及
ハ。毎書略。古の人山川を活ぬあるべきいや
返書略。上古よハ。北を征
ハ。南を討。東ハ。西を討ん。と起し。林本をまし。流川を
し。天下の男を集てそ。家屋を造ハらて。国
まあらバ。我よ私を入材本をおし。一人の私をよくき不
手れ。山法をそらて。法制法をおらく
うき事ハ一也の書簡乃そとくきよあれい
一来書略。国くいたる志をそ。書を著出すべく。書を著すべく
しも。神剣面をそ。此人よ。江戸のよ筋しそうそうれへ
ひとりハ。まなと及ハさらて。この其学流なりとこのひく。雑

へい。志々実よいへとも。文育を教ゆる
やうなる不正乃学我信よ陽儒法佛の
志あるの人をそ。江戸学ハ。江戸学ハ。
師をいうものハ。あよハ。江戸学ハ。
問よハ後世のためよ仕いへとて。文学よ人志
志先輩いゆへよ。しさて志
堂かまりきの石るとも。かまれ。
よい右乃ものそ。牧山書をも。かまれ。
うよいへとも。世人ハ其実とねせて。学実しねい
へとも。あきるの最ハ中江氏。そ。生をもへかうよい。今
よりハ志ありて。弟子よ。
返書略。問こ承及そうまよ。

對して久安かうりくれい。二三度をうつてきく人なし。合いへしを紙たうり多外はめ。報いる事なくいはゞひとりうれい。古方より爲ることの人よハ教ふることなくいはゞ一寸度つてハ利後いつて文武の德業心法のたゞこと人乃受用せうへき。入徳乃堦をかよはゞ度なれば後度ごとに世間の勢ひて分をもつぱらいへし不及是ばいふくのきるのの罪ハそうさし方れ分よかうりい。一生重実れ道言虛妄をつゝしへし。なれ物よハをの汚うれ利なくいへし。重実乃罪ハ久ふ雲れてくれい

一来書略。論令注度を。人性をうまれ初めの信よ。意をあらはすことなりと承い。元の儀よい。昔孝子ありて父母をおもふ事久しうして父母を失ひ給ふ。孝子ふかく時のそれ者。唐流をおもひ出てうれしくもかなしくもあるやうにおぼえ給ふ。日本にて此ことをいふハ。ほゞ此意なり。

一過書略。乃注とハ別するものそれと。なりひくくは乃ことをいふくれい。法ハ中國の聖人といへども代ごとに移りいく。況日本へ移しては。いよくさき事多くいひ乃ことに拘泥せさらんことをねがふ。天地人ハ配して五行ハ配をいまさら德乃名をつけ人の教乃ごとくいふ時もいよくさらハ既行をれそうさいまさら人生せさうしハ時も。天地よりわれいまさら天地よりうまれさうしハ時も。天地よりわれ。人統天地而ハ保

をとりいたせ。元来こゝろ得ちがひ。法後世をや。法ハ聖人時處位
み為て事の宜しき制作し給へる故なり。其位なくて
ていたづらに死を。時を得ざる人位かゝるものなり。不合
男女ともに死をのおの不合を以て死ハ。却るて害あ
り。今の学者乃道ハ文ハ法ぞと。時處位をも
至善をも叶ハされバなり。其ゆへハ。今の法ハ流
くさる学者ハ仁義をもて。事利害乃情遣ひ。只
己が栄賀のをさをさる為なり。事ハ動めぬ法を用ひ。経学の
文理をいふ成ゆく乃者ありとなり。世中ハ人ひ随ひ
きいふ病あり。宜仁を以生存の者ハ非あるこ
とあり。大意をこゝろえるものハ。細々と不顧篤実なる者ハ。
才知不足ゆへ。作法をこゝろえて。事を為ざる者也。

人をたゝ家を捨て学成ねバ。和の三ハ徳より外
乃病なり。後の二ハ元気を根さして。和をとゝくことを
得ざるなり。是生存文理よりおこる。雎乃行
法者といふを及へり。雎鳩（ミサゴ）長幼乃序ハ心ざし事ハ格
しく。雎鳥（ミサゴ）飛ては雎鳥（ミサゴ）鷲（ワシ）の夫婦よく和して。別をく
よく及ぶものなれバ。これ乃ハ陽鳥なるゆへ大気を多乃
ゆへ。大気ハ神ハ礼なり。この故に不知不識うごかざる
鷲（ワシ）鷲ハ水鳥なれバ。水象の神ハ動なり。故
夫婦別乃不知ハ。それのうへく幼乃ハ
陽鳥なり。今礼を去ざるハ。気を経をしめるもの
なるゆへ。公義不の者なり。文義を後

一格法をいふのことなり。或ハ師ともし主ともし或ハ
己を主とし或ハ他乃学ぶ所の非を揚ることなり。かゝる
賢士ありてこそ名ある利欲(りよく)漸遠(ようえん)く。而世乃名を求く毀誉(きよ)よ
動くことは。市井の凡俗よりも尤甚しく。況や況ハ其主
乃異(こと)なることあるをや。佛氏乃日蓮一伊ハ(ママ)ら。を
云ふ徒ともを数うまでもなく。其家或ハ武将の従事(つかへ)て居ハ
房舎乃大旨義経をこと名ありて其実ハ精楽(せいらく)なる
うへ。凡名と不免して其主ともいふも甚しき
ゝ凡史なり。今こゝに格法のまゝ心志強(こわ)ゝあり
て。ゆりんことを恥るうた人情と善(よ)かそハ(ママ)ぬ
まくしと今の人情ともいふものハもつとゆ義乃
ゆくふかきことを人情あくまでゆくふかきもの

のゝ。此ハ人乃利欲とそこに義とそこれをいふ
事と義理とハ又ゝ別あり。事ハ公のことも人情よ廃り
なハをも免あるべし。義の大なるハ人情を修るよきま
あるべし

一来書曰。仇討のまことハ孝子義士乃ことなれバ
敢て不義ともいふ。今の学者ハ仇討を不義ともいふ
ハ承ハ加様のまゝおくハ偽乃一流乃
きハいふまでもなけれどもそれを面白ゝおもハ退
返書曰。生民の始ハ父母ゝ宗族を又母ゝ宗族ハ後ゝ生れ
いへゝ人情ハ元乃ことなり。いつまでを変ひてを同ゝ
事なれ。古乃人も元乃人も同性を探ゝ。者ハ(ママ)ものハ
あるまい。世ゝ功あるまゝ。ぞまゝ性を修ゝ徳ありて

家を起しさせ乃子孫代々豪富にして。その徳
多幼の子孫あるを不思議にして。幼徳の子孫とおぼ
るをいぶかしく思ふ。徳行ありし人の死せるを
不幸とおもふ。又方幼の人々同姓ありても。不徳不才の
ハ。天下関家の任官を受ふ人を多く抜おとす。家
とふハ云ふべからず。幼徳ハいつまでも嗣しめらるべき
ものなり。又同姓乃子孫あるべきの
ふ方ありてとを奈ハいまだ一人も絶ハ官禄と絶ふる
ものあらず。純姓ありても方徳ある人ハ語るべし。陶唐氏ハ有
虞氏と云ふべく。黍をもなせしめ。家をも嗣しめらるべきあ
る

ねーそうするみくいや
返書略。重人乃住まで。人乃
父母ととをあらわせ父母の喪ハ粗くちう。まの父母
ハ喪ハ三年ときめくハ我兄方又
母乃服なそうまい。それをまも兄牙まゐとあるこうやや
理屈までハいろくいもそうしへてそ。父母喪ハ
いそそれめーハ乃ようみてあるてうめへ。數乃人うくいハ。
らととういう。況世事れあるうーたるやおうくまる
へきそうめへ。世運文明のはをつくいぬまうくいぬ
いるハはくまかつとも。公乃徒事實よ不利とく。
何の益うあくきつとなくいきハ我公の乃なるあ

乃学者。已う公の乃習をハ不洗して。世俗をそうつ。はをこ
むとして。其公ハ信ととおうあう者あう。人これと動くあおう
免へこと乃ととうまる。乃法ハ時勢あそう実俄ハ世俗あも
慢ら都まハいはの時うあうとをたことき。吾人ま志
あへハ。はくやそうまるハ我のそをとうそ可あう。人と數乃
ろうれ

一来書略。近年俳乃生れぴうしき書おいてた方まも乃
筆作の招うい。掛走おとうまる書
多くい。又うまうあくようまる俳う乃生ハ学乃為ハ
の閑をうて書辛うもうくい。絶まても俗好漢しくた
氣まう実ハ者割ちうい。実の門書和の為まて。深くなう
乃作とねるようい。

作ることのごとくならず。百歳の後ハ今の著ス人數多人ハ。皆ことごとく滅亡して。其跡ハ有ともしれず。たゞ一部ニ傳ハりたる書ハ。七十余の人ハ。めづらしからず。二百年三百年ニ傳ハりたる書ハ。まれなるべし。其まれなるハ。何ぞや。其書ハ。人の心ニかなひ。人の用ニ便ありて。人の捨ざるゆへなり。されバ書ハ。人の心ニかなひ。人の用ニ便ありて。人の捨ざるやうニ作るハ。著述の大本なり。其大本ハ。何ぞや。曰。人の心ニかなひ。人の用ニ便ありて。人の捨ざるハ。其人の性ニ本づきて。其人の情ニ通ずるにあり。其人の性ニ本づきて。其人の情ニ通ずるハ。何ぞや。曰。其人の性ニ本づきて。其人の情ニ通ずるハ。其人の心ニかなひ。其人の用ニ便ありて。其人の捨ざるゆへなり。されバ著述ハ。其人の性ニ本づきて。其人の情ニ通ずるやうニ作るハ。著述の大本なり。其大本

一

通書略人乃ち其の

遠からず。我等凡そ書を読みて
して釈切なるものは賢仏聖人
て。精を出しいそしみ学問
愚人和書ばかり意得
一日も早く文章ばかり
と浅きこと。俗に大工異ならず。
ありても。書ばかり知りたる
よりうらやましき。学問の元俗よ

とそうらふかしいかやうの
ちうじ時勢位乃至富を離
ありて。大同の基本ありて。
雪語を学文字用うらふ。得
遠方の同志ばかり求めよ
まいりんとして。学徳の
き。一助ともなるべきの和書
らんうをうかがうべき。
ら。浅よりおうてそれうる
まさう事久しく人倫
をおけうてうら。
うのうへ人今に益あるこ

うん。古より乃ち今に至るまで。淺世と佛と又一人の天民たり。天の君あり。いくらも八罪あるまじ。
一乘書曉。天下は佛出生まれ。生まれを行欲ありて八我慢邪念の者多く。生まれを空ありて空ありて
うまれ乃ち。佛心ありて人間世界を滅さんとす。千万をひとかたまりとも。
返書曉。世乃は佛出多きことを。
根を堅くせて千歳まであまりさ
ふれば。平ら安らかなる德の強き一乘を
世乃の佛者乃故とたり。佛を滅さんとす。
今は佛乃人間世界を盛ると失ひまさ盛ると失ひ
天命八をそれ滅乃ひとりぞ。その故八物皆盛衰あり。
ことしい佛出あらんとも。空ありとも。

ばかりんや。もろもろ今の佛出不仁を乃ちこと。元佛
よ越さう。去もの故ならぬ。こしに天命ありて
うみてこと不徳の強まをと。彼ら平
足たりう故を出せば。平と失ふ
命天命あり。用心ばこと失ふ
ありうん

一乘書曉。乃よ志あるものは。世
ばかりてこと志の実ありて
てもこ行ばようまあり。ん
返書曉。心八至心に真のをみてこと幸ない。志
あるとよ人を強徹乃故の実有ない。又志ありて
行ばよう人も強徹の如もろ人うん。吉私こと父母兄弟妻

葉義外書卷三終

集義外書 五